

第3回ふくいの森林・林業のあり方検討会における主な意見

1. Fukui Forest Design 推進プロジェクトについて

- ・ 半林半Xの定義について、森林組合や林業事業体で働いている方々は地域の森林や森林所有者の事情に詳しいので、彼らにも地域おこしに繋がるような取り組みを行ってもらえるよう、定義の中に加えてはどうか。また、自伐型林業の定義をもう少し分かりやすく記載したほうがよい。
- ・ 航空レーザ計測データをいかに有効活用していけるかが非常に重要。どこを主伐して、その後どう更新していくのか、スギ・ヒノキを植栽するのか。あるいはどこを間伐してどう針広混交林化していくのか。そうした計画は、航空レーザで得られる森林情報とリンクしている。計測データを施業の効率化に活かしていくことももちろん大事だが、併せて全体の森林をどうしていくかという将来設計にまで繋がるよう活用していけるといいだろう。
- ・ 木材需給調整システムは、関係者で情報共有すれば上手く回っていくというものではない。他府県の事例では、山側、製材会社、工務店等が連携した小さなサプライチェーンを作り、どのような情報をどのように共有したらいいか、整理しながら進めるモデルケースをまずは構築するなどしている。このような事例も参考にしながら、分かりやすく見える形で運用していくことを検討してほしい。
- ・ ふくい林業カレッジを今よりもフレキシビリティに運営することは制度上難しいことは仕方のないことだが、このような現場の声があるということも踏まえて運営してほしい。
- ・ 担い手の育成について、本計画の実施段階では、森林組合を含めた意欲と能力のある林業事業体の基盤強化も含めて実施すると、次に繋がる計画になるだろう。
- ・ 製材業者としては、良い木を出してほしいというのが本音。そうすれば価値も上がり稼げる林業になると思っている。また、意欲ある製材事業者の育成については、事業継承や統合などを具体的にどのように進めていくのか今後考えていってほしい。
- ・ 県産材の需要拡大の施策として、小梁や心去材などの建築部材の活用は良い視点だと思う。実行段階ではさらに工夫して進めてほしい。
- ・ 災害対策としてボイラーを公民館や温浴施設に設置し、自伐型林業従事者がC材を薪として供給することで、小規模林業でも稼げるようにしてほしい。

2. 森を「守り」「活かし」「慈しむ」推進プロジェクト

- ・ 公益的機能を最大限に発揮する森づくりについて、記載が病虫獣害対策に終始しているのが気になる。確かに病虫獣害防止は大切だが、「生態系に配慮した」といった文言を入れると、より補完されるのではないかな。また、シカ捕獲の写真がリアルすぎるので差し替えた方がよいだろう。
- ・ 公益的機能には様々なものがある。取り組む施策が公益的機能の増進にどう関わる

のか、その関連性を少し加えてはどうか。公益的機能はこれだけなのかと、誤解をされないよう検討してほしい。

- ・ シカの食害対策は、生態系を守る意味でも重要な位置付けになっており、シカがいると、幼齢木が次々と食べられ天然更新や針広混交林化は全く成立しない。シカ捕獲の写真は確かにショッキングではあるが、県民の皆さんに現実を捉えていただくという意味でも、写真はこのままでもいいのではないかと思う。
- ・ 新たな森林ビジネスの展開について、マウンテンバイクレースやトレイルランは費用が掛かり、ビジネスとして持続しないのではないか。規模は小さくても、地域の特性を活かしつつ森林そのものに価値を見出すような持続可能なビジネスも視野に入れてほしい。
- ・ 令和7年8月に「山の日」全国大会が福井で行われるので、基本計画に少しでも記載してはどうか。
- ・ 森林環境教育について、例えば保育園の先生方は自然の中で子どもたちを活動させたいと思っているし、子どもたち自身も生き生きとする。森林ビジネスに取り組む団体を15団体に増やすという目標が記載されているが、大きなイベントを開催する団体はなかなか増えてこないと思うので、小さいビジネスを手助けするような支援があるといい。そうしたビジネスを展開する団体に保育園の子どもたちを参加させたいと思ったときに支援があると保育園としてもコスト面で助かるだろう。
- ・ 林業は環境を守る上でとても大切である。子どもの時から教育を通じて、森林を守るということをどんどん伝え、継続してやっていくことが大事である。

3. その他（全体総括）

- ・ 5年後の次の計画に結びつけていけるように本計画を実行していったほしい。特に航空レーザなどのICT技術はこの5年間で実装段階に入ってくる。いかに現場で工夫するかが重要になる。
- ・ 本計画の運用が非常に大事になる。例えば、航空レーザ計測データを現場でいかに使いやすく提供するか、木材需給調整システムを通して、いかに木材の質や需要に見合った供給をするか。これらを実現できれば、木材の付加価値を高め、山に還元でき、稼げる林業に繋がっていくのでぜひ実現してほしい。
- ・ 数値目標は面積などの量的な評価になるのはやむを得ないが、主伐後の再生林で実際にどれだけ更新ができているのか、あるいは針広混交林化できているのかなど、質的に山が維持されているのかという評価も大事になってくるため、計画が実効性のあるものとなるように運用していったほしい。
- ・ 福井県でも森林資源が充実してきており、それを反映した基本計画という位置付けである。サプライチェーンのあるべき姿を構築し、どんどん木材を使って、資源を活用できるようにしていったほしい。